

飯舘村に行って

東京大学
教養学部理科Ⅱ類1年

1. 飯舘村へ行くこととなった経緯

駒場の総合科目「食を支える水と土の環境科学」で溝口先生（農学部農学国際専攻教授）が NPO 法人「ふくしま再生の会（以降、再生の会）」の会員として週末に飯舘村で活動しているのを知った。この活動に関心を持ったので、溝口先生にメールで飯舘村に行ってみたいとお願いした。すると、溝口先生からすぐに快諾の返信メールが来た。メールには NPO 法人のホームページやこれまでの活動内容、現地の放射線量状況とその対策などの情報があった。僕は事前にこれらの情報に目を通し、当日の朝を迎えた。

2. 活動内容

当日（6月21日）、東京駅から新幹線に乗り込んだ。しばらくして上野駅から乗り込んだ溝口先生と大学院生の鈴木さんと合流した。再生の会の田尾さんと小原さんも一緒だった。車中では飯舘村でその日行う活動の話に加えて、溝口先生が「何の役に立つのか全く分からなかった駒場時代の数学がいま放射線測定装置を開発するのに不可欠なんだ。線形代数をやっておいて良かったよ」というような話を伺った。

福島駅で久保先生（農学部生物・環境工学専攻教授）と合流し、溝口先生・鈴木さん・僕と4人でレンタカーに乗って飯舘村へ向かうことになった。途中、農業用品店トマト（地方にはこうした農業資材専門店があるそうです）に立ち寄って、溝口先生と鈴木さんが「土壌くん（開発中の現場土壌放射能分布測定器）」の補正に必要な実験資材を購入した。トマトには水田の地下に埋設する暗渠という管や栓もあり、これを見ながら日本の水田暗渠について溝口先生や久保先生から特別講義して頂いた。その他にも道中2人の教授には農業に限らない様々な分野の話を伺いとても楽しかった。そうしているうちに飯舘村佐須地区の菅野宗夫さん宅に到着した。

菅野さん宅で昼飯を食べながら、この日たまたま来られていた厚生省の食品

安全委員会研究者の分析結果を先生たちと一緒に聞いた。分析の結果に先生たちが「これはどうなんだろう？」など、いろいろと質問するのを聞いて『放射能のことは未知である』というけれど、本当にわからないことだらけなんだな」と実感した。

午後は久保先生が設計したゲートの設置を手伝った。ゲートのつくりはシンプルで特に難しいものではないのに、増水時に田圃に流れ込む水量を少なくすることで粘土に付着した放射性物質が流れ込むことを防ぐ働きをすることがとても興味深かった。その後は溝口先生に連れられて、飯舘村小宮地区の大久保金一さん宅に行った。花づくり名人の大久保さんから「マキバノハナゾノ」計画を聞きながら、想像を膨らませ、手伝いにまた来て完成を見たいと思った。

夜は伊達市にある再生の会の常宿「ふるさと体験スクール」に宿泊した。

翌日の午前中はイノシシが入ってこないように、水田周りにつける牧柵の設置を手伝った。なかなかしんどかったが、普段はアラ古希（再生の会の70歳代のボランティア）の方々がこうした作業をやっているのかとその体力に驚いた。午後は溝口先生と鈴木さんが土壌くんの補正実験をするというのでそれを手伝った。重い鉛板を運ぶだけだったが、それでも研究の一端を垣間見ることができて大変ためになった。

3. ボランティア活動についての感想

僕にとっては震災後、今回で5回目の東北であった。というのも高校時代に生徒会（学校側）主体で参加者を募って東北合宿と称し、東北を訪れる企画が長期休みのたびに行われていたからだ。高校時代は、「現地に行って、現状を見て、そのうえで人の話を聞く」ことが主体であった。さまざま現地の方（加工場を営んでいる方やホテルの社長さん、主婦の方など）に話を伺った。市長さんに話を伺ったこともある。しかし、これらの話はどちらかというと一般的な方の話で、理系の側の目線から話を聞いたり、東北についてモノを考えたことはほとんどなかった。なので、今回溝口先生に同行して得た経験は本当に新鮮だった。（理系文系という区別が妥当かはひとまず置いておいて）僕は理系の学生であるが、もちろん文系の観点からモノを考えることは必要だと思っている。が、それだけでは面白くない、というのが本音であった。もう少し言い方を変えれば、今回5回目にしてようやく自分の将来と東北がつながったと言える。今までは、「多くの問題がいまだ被災地にはある」ことは理解していたし、

「今後の日本の社会がぶつかるであろう問題を先取りしている」ことも理解はしていたが、「で、自分はどこにかかわっていくの?」という感じがあった。それが今回の訪問をきっかけに少し見えたような気がする。もちろんまだまだ自分に見えていないことは多くあろうが、それは飯舘村（を含む東北）に継続的に行くうちに見えてくるのではないかと楽観している。そういう意味で今回の飯舘村は非常に自分にとって楽しかったし、必ずまた同行させて頂こうと思っている。

一般的に東北の問題は文系のモノであって理系には関係ない、という風潮が強い気がする。その流れのため、理系の者は文系の者よりも東北を訪れることに決心がつかない人が多いのではなかろうか。が、今回のように理系でも楽しめる（という表現が適切かどうかはわからないが）ものもあるので、次回行くときはぜひ理系の友達も誘いたいと思っている。実際、今回の話を友人にしたところ、一度行ってみたいと言ってくれた友人もいた。

しかしながら、継続的に東北を訪れるには金銭的な障壁がある。特に一人暮らしの学生にとってはなかなかの出費である。現在、東京大学には、一年に二回合計二万円まで支援してもらえる制度があると聞いた。この制度はボランティア経験 0 を 1 にするためにはとても意義があり、東北の方々にとってもとても良いと思う。だが、本当に大事なことは、1 度訪れた後も継続的に東北を訪れることだと思う。そのための何か別の制度があれば嬉しい。